



ダイビング船上の筆者

ようど良いサイズがあればよいのだが、日本人は小柄なため、どれもブカブカである。その上、手作りのため、使い古しのウエットスーツは接着剤がはがれて穴だらけである。

ピアソカレッジは北海道と並ぶ緯度に位置する。ダイビングスポットは潮の干満の差の激しさで有名なユアンデフーカ海峡。初めてのダイビングでは潜っても五メートル程度なのだが、激しい潮流の中、ブカブカで穴だらけのウエットスーツは体温を保持できず、寒さでガチガチになった。翌年、後輩の日本人女性が私と同じ目に遭い、低体温症となって病院に運ばれた。それほど寒いのだ。

ダイビング活動中のハブニングは数えきれない。ある時、丸太材による湖の環境汚染を調査することになった。一メートルほどの金属の筒を湖底にさして泥を採取する

のだ。真冬である。トラックの荷台に乗せられて着いた湖は凍っていた。薄氷のはつた湖へボートで漕ぎ出し、バディ(パートナー)と共に水を割って湖底へ潜った。ひとは船上で待つ。氷点下の水中には明らかに異なる二つの層があった。自然の不思議に思いを馳せる暇もなくウエットスーツの中に氷点下の水が滲みしてきた。耳がキーンとする。だが、潜っているうちはまだいい。作業のために体を動かすので温まる。バディを交替して再度サンプリングすることになり、今度は船上で待つことになった。水上を渡る風にどんだん体温を奪われた。帰り道も濡れたウエットスーツ姿のまま、オープントラックの荷台でバディと震えながら体を動かし、励まし合った。皮下脂肪に感謝。

別の時には、ユアンデフーカ海峡に設置した潮流計を交換することになった。潮が

満ちて引きはじめるとき、一時的に潮流が止まる。この風の時間を見計らって潮流計を交換するのだが、もたもたしているとあつという間に激しい潮流となつて遥か彼方まで流されてしまう。このときは四組のダイバーが潜ったが、作業を終えて浮上すると既に激しい潮の流れ。私

は必死で流れに抵抗してダイビング用のボートに泳ぎ着いた。ところが、他のダイバーを救出するため、船上にあげてもらえなのまま、ボートは動き出した。垂らされた浮きにひたすらしがみついていた。結局二組のダイバーたちがあれよという間に遠くへ流されて、海難救助隊のお世話になった。思えば過酷なサービスを若さで乗り切ったものである。

昨年のUWCニュースレターで、ユアンデフーカ海峡の潮流を利用した発電が、クリーンエネルギーとして、カナダの国を挙げてのプロジェクトになるという記事があった。あの時の潮流調査が少しは役に立ったと思うと、ちょっと嬉しい。

いま北海道で

現在、私は東京から札幌へ移り住んでいる。都会から脱出し、自然に恵まれた北海道に五年前にきた。幼少の頃からの悲願を達成した訳である。ところが、自然あふれる北海道と想っていたところは、実は一〇年前から開拓という名の下、自然破壊し尽くされた場所だった。これからは、開拓の爪痕を治癒すべく、仕事の傍ら、北海道の環境保全のために小さな運動をやっていると思う。カナダでの体験を活かしながら。

四半世紀前の ピアソンカレッジ

一九八一年UWCカナダ・ピアソンカレッジ(PC)卒。九二年東京医科歯科大学歯学部卒業。九六年同大学大学院修了、歯学博士号取得。九九年同大学歯学部第一矯正科専攻課程修了。九九―二〇〇二年東京および近郊の歯科医院勤務。二〇〇二年北海道札幌市に移転。二〇〇七年ヒロデンタルクリニック開業。



歯科医師
鈴木明子
すずき あきこ

▶ピアソンカレッジを 志望した理由・行けた理由

三〇年ほど前、高度経済成長期であった日本の都会は大気汚染などの公害に悩まされていた。東京で生まれ育った私は、コンクリートとアスファルトで固められ、人混みと自動車の排気ガスと光化学スモッグの都会の生活が嫌でたまらなかった。

大自然の中で暮らすことに強いあこがれを抱きながら、都立高校へ進学した。

高校では好きだった水泳部に迷わず入部した。好きな部活動に打ち込めることはすばらしいことだった。ひと夏、夢中になって水泳にのめり込んだが、夏が終わるとほとんど活動しなくなり、体力と暇を持て余

していた頃、校内の掲示板でUWCの存在を知った。カナダのピアソンカレッジ。あこがれの大自然の宝庫、カナダ。だめでもともと、やってみようと、選考試験を受けたのだった。英語は苦手であったが、高いところから飛び込む度胸は水泳部で鍛えられている。何を言われているかほとんどわからない英語での面接もひたすら度胸でクリアした。

どうせだめだと思っていたので、合格通知が来たときは驚いた。だが、もつと驚いたのはわが父だったようだ。父は合格通知を私に見せずに捨てるように言ったら、何年もたってから母に聞いた。娘を手元に置きたいと思う父の気持ちにちよつと泣けた。

これも後からわかったことだが、私が行くことになった数年前に、ピアソンカレ

●(社)ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四一七名の卒業生を輩出している。

ジに行った先輩が、たしなんでいた琴を持参し、カレッジに寄贈していた。その先輩が卒業してしまい、弾く人のいない楽器が残されていた。私も小学校の頃から琴を習っていたので、そのおかげでUWCの選考に残ったのではないかと今は思っている。ことあるごとに着物を着て琴の演奏をさせられ、気恥ずかしかった。

▶大自然の中の活動

ピアソンカレッジは想像以上にすばらしい場所であった。キャンパスは深い原生林に囲まれ、海にはアザラシやトドが岩場を覆い尽くす灯台の島、Race Rocks。

UWCではサーブिस、ボランティアという課外活動がある。得意の泳力を活かしたいと思い、ボランティアは障害者の水泳の補助を、サーブिसはダイビングを希望した。

当時ピアソンカレッジではウエットスーツを自分で作っていた。これには手間も時間もかかるため、初めての海でのトレーニングには製作が間に合わない。そのため、上級生のウエットスーツを借りて潜る。ち